筑波大学留学生センターにおける学習者のニーズ分析

―J500-900「話す」の場合―

許　允瑄　　関崎　博紀

要　旨

本稿は、筑波大学留学センターにおける学習者のニーズ調査の中で、中上級の学習者の「話す」の場合の結果について報告するものである。質問内容は、学習の目的、必要性に関するものと、学習者がその場面で遭遇する困難点に関するものであり、自由記述の形式で回答してもらった。その結果、学習者は主にアカデミックな場面と日常生活の場面で必要性を感じ、一番困難だと思う項目は「語彙・表現」であった。
【キーワード】ニーズ調査　「話す」

A Learner Needs Analysis for the Intermediate and Advanced "Speaking" Classes (J500-900) at the International Student Center of the University of Tsukuba

HUR Yoonsun, SEKIZAKI Hironori

【Abstract】This paper is a report of the result of a Needs Analysis of intermediate and advanced learners in "speaking" classes at the International Student Center of the of University Tsukuba. The survey, which requires learners to write down their answers, includes questions about the kinds of situations in which learners feel the necessities of practicing speaking abilities, and the difficulties learners encounter in those situations.
【Keywords】Needs analysis, Speaking class

１．概要

本稿では、2010年12月に筑波大学留学生センターにおいて実施したニーズ調査について、J500からJ900の「話す」のニーズを分析した結果を報告する。調査では、筑波大学留学センター補講コース受講者に対してアンケートが行われ、全体では389名から回答を得た。そのうち、中上級の受講者の回答は225名分で、「話す」についてはその全員から回答を得た。質問の内容は、「あなたは今、どんな場面で、何をするために「話す」練習をする必要がありますか。必要性の高いものをできるだけ具体的に書いてください」（以下、Ｑ１）と、「その場面で「話す」時に難しいと思うことは何ですか」（以下、Ｑ２）である。それぞれ自由記述式で回答を依頼した。（調査全体の概要は関崎2012を参照されたい）。以下、２において分析の方法を述べる。３において結果を述べる。

２．分析方法

2.1　数量化の方法

得られた回答を分析するのにあたり、どのような回答が多いのかという傾向を探るため、自由記述で得られた回答を数量化した。方法は、第一筆者が回答からキーワードを抽出し、下位カテゴリーを作った後、さらに上位カテゴリーにまとめた。詳しいカテゴリーの説明は以下の2.2で述べる。

2.2　カテゴリーの説明

質問によってカテゴリーが異なるため、質問ごとにカテゴリーを説明する。以下にＱ１とＱ２のそれぞれのカテゴリーについて述べる。

2.2.1　Ｑ１のカテゴリー（学習の目的・必要性）

学習の目的・必要性に関するカテゴリーは、「アカデミック」「ビジネス」「日常生活」の３つ場面による分類と、「伝える能力」と「その他」の大きく５つの上位カテゴリーに分類された。以下に５つの上位カテゴリーと下位カテゴリーを述べる。

① 伝える能力（伝達能力）

・自分のことや意見（考えていること）を伝える
・分かりやすく伝える
・正確に伝える
・流暢に話す
・自由に話す

② アカデミック
・授業・ゼミ
・専門的な（語彙使用）話
・口頭発表能力
・ディスカッション能力
・学校・授業でのコミュニケーション
－先生との会話（敬語）
－先輩・同級生との話
・面接試験
③ ビジネス
・就職のための面接
・仕事で使う日本語
④ 日常生活
・生活に必要な日本語能力
・日本人・外国人との交流
・アルバイト
・日常会話（友人との会話）
・日本の社会・文化に馴染むため
⑤ その他

2.2.2　Q2のカテゴリー（学習者がその場面で遭遇する困難点）

Q2の場合、話すことにおいて困難だと思う項目を「話す」「聞く」「情意的要因」「その他」の大きく4つのカテゴリーに分け、さらに下位カテゴリーに分類を行った。分類結果、話すことに対して困難点を感じる項目が多様に見られ、項目によっては更なる下位カテゴリーへ分類を行った。以下が分類したカテゴリーである。

① 話す
・語彙・表現
（語彙量、専門用語、未知の語彙・表現、日本語らしい表現、表現のバリエーション、特定の表現やことわざのような慣用句、話し言葉と書きことばの使い分け、スピーチレベルに応じた語彙・表現の選択）
・文法
（文法の間違い、苦手な文法項目）

・発音
（正しくない発音、同音同意の発音、長短音・促音の区別、アクセント・イントネーション）
・尊敬語・謙譲語
・発表
（発表の基本的なやり方、発表用の表現）
・迅速性
・流暢性
・表現力・伝達能力
・運用能力（分かっている言葉が話す場面では出てこない）
・相手の発話に対する反応
・母語の影響
・論理性
・一貫性・結束性
・正確性
・会話練習の不足
・話題
（話題作り・話題の豊富性、専門的な話）

② 聞く
・聞き取れない
・相手の話が理解できない

③ 情意的要因（緊張によるもの）

④ その他

3．結果

以下、分類した結果を報告する。3.1には、２節で示したカテゴリーに分類した結果を示す。3.2では、その結果をレベル別に見た結果を、3.3では、それを身分別に見た結果を示す。なお、以下の結果の合計は必ずしも225にはなっていないことがあるが、これは１人の受講生の回答が複数のカテゴリーに分類できる記述を含んでいる場合があったためである。

3.1　カテゴリーのみの結果

ここでは、全体の結果として、カテゴリーに分類した結果を述べる。

3.1.1　学習の目的・必要性に関するのカテゴリー別の結果

まず、上位カテゴリーの結果を図１に示す。上位カテゴリーの分類結果、「アカデミック」の項目の割合が40％で一番高く、次いで「日常会話」が35％を占めており、２番目に高く見られた。両者を合わせると75％に上る。

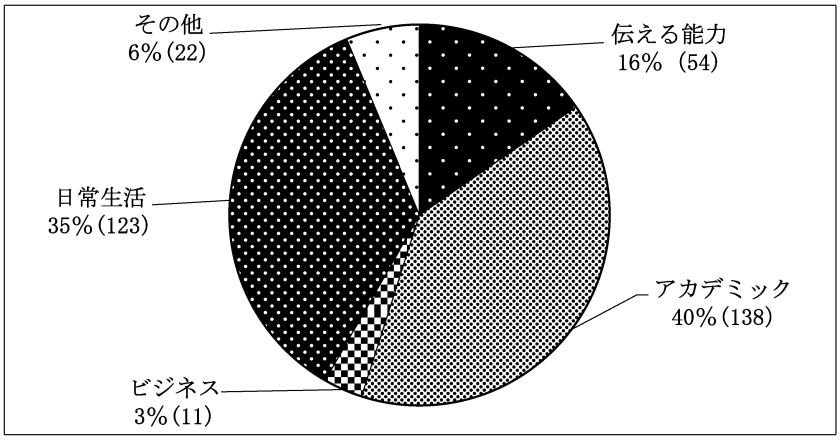

図１．Ｑ１の上位カテゴリー別結果

続いて、割合が高った「アカデミック」と「日常生活」の２つの項目に関して、下位カテゴリー別の結果を述べる。まず、以下に示す図２は「アカデミック」の下位カテゴリーの結果である。「アカデミック」の場合、口頭発表能力が40％を占め、アカデミックの中でも一番必要とされる項目であった。

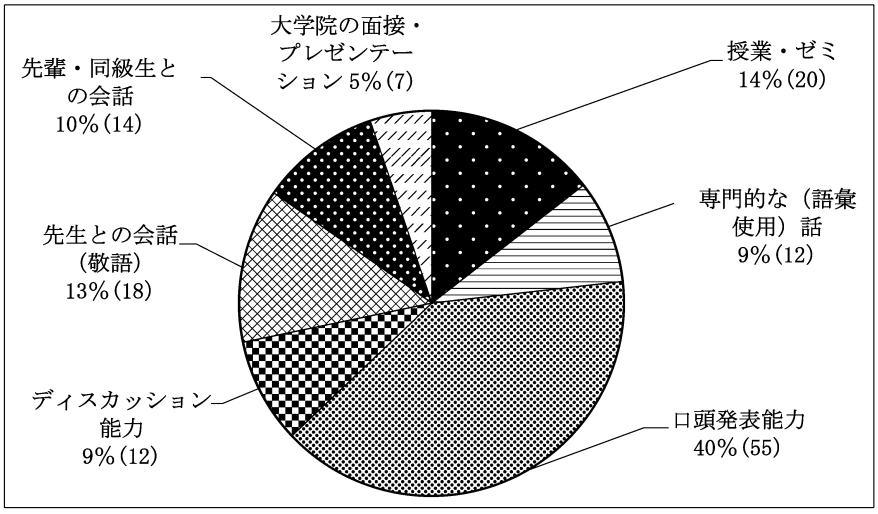

図２．「アカデミック」の下位カテゴリー別結果

次に、「日常生活」の下位カテゴリーの結果を以下の図３に示す。「日常生活」に関しては、生活に必要な日本語能力が37％で一番高く、次いで日本人・外国人との交流が31％を占め、その次に日常会話（友人との会話）が26％であった。

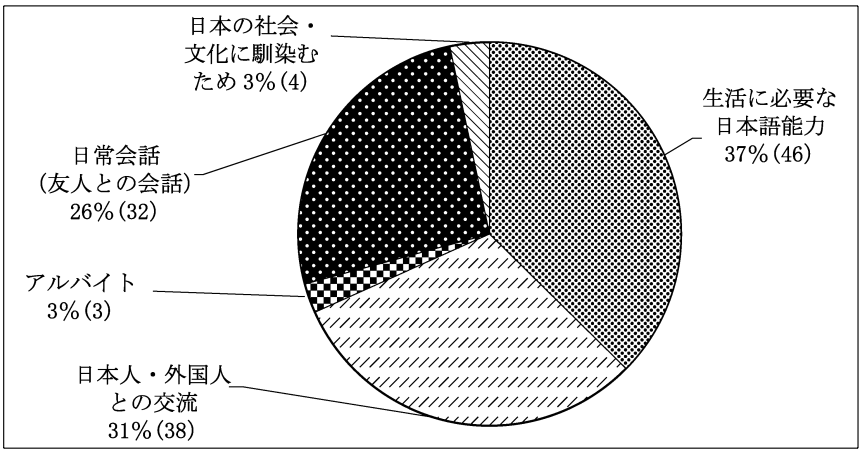

図３．「日常会話」の下位カテゴリーの分類

3.1.2　学習者がその場面で遭遇する困難点に関するのカテゴリー別の結果

以下の図４は上位カテゴリーのみの結果であるが、この図４の結果から見てみると、「話す」が全体の回答の301件のうち256件見られ、85％を占めており、他の３つのカテゴリーを圧倒している。

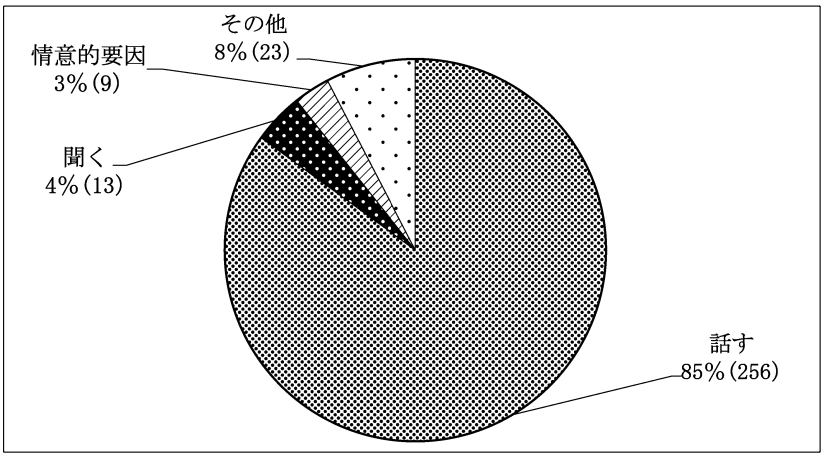

図４．Ｑ２の上位カテゴリー別結果

「話す」の下位カテゴリーによる分類を以下の表１に示す。

表１　「話す」の下位カテゴリーの結果

カテゴリー	割合（数値）
語彙・表現	30％（ 78）
文法	13％（ 32）
尊敬語・謙譲語	11％（ 27）
表現力・伝達能力	10％（ 26）
正確性	7％（ 18）
発音	4％（ 10）
迅速性	4％（ 10）
運用能力	4％（ 10）
発表	3％（ 8）
流暢性	3％（ 7）
話題	2％（ 6）
母語の影響	2％（ 5）
論理性	2％（ 5）
相手の発話に対する反応	2％（ 5）
会話練習の不足	2％（ 5）
一貫性・結束性	2％（ 4）
合計	100％(256)

表１の結果を見てみると、「話す」の下位カテゴリーの中で語彙・表現が30％で一番高い結果となり、次いで尊敬語・謙譲語が11％、表現・伝達能力が10％であった。

3．2　レベル別に分類した結果

ここでは、レベル別に分類した結果を述べる。受講コースの中上級レベルでは、J500からJ900までの５つのレベルがあるが、５段階に分類すると数値が小さくなってしまって傾向が把握しにくい。そこで、５つのレベルを、中級前半に当たるJ521-J621、中級後半に当たるJ721-J821、上級に当たるJ921という３つのグループに分け、分析を行うことにする。

3．2．1　Ｑ１のレベル別に分類した結果

以下の図５、６、７は各レベル別の結果になるが、まず図５のJ521-621の場合は、日常生活が39％を占め、アカデミック（35％）より少し高い割合を占めている。それに対し、図６

のJ721-J821の結果を見てみると、日常生活（31％）よりアカデミック（45％）に対するニーズが高い。最後に図７のJ921の場合はJ721-J821の場合と同様、日常生活（33％）よりアカデミック（45％）のほうが高い割合を示している。また、ビジネスが占める割合が５％を占め、他のグループより高くなっていることが分かる。

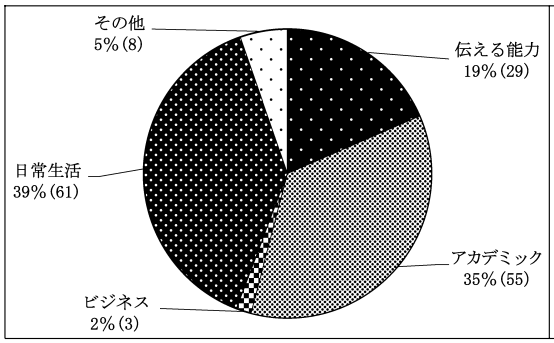

図５．Ｑ１の結果J521-J621の場合（91人）

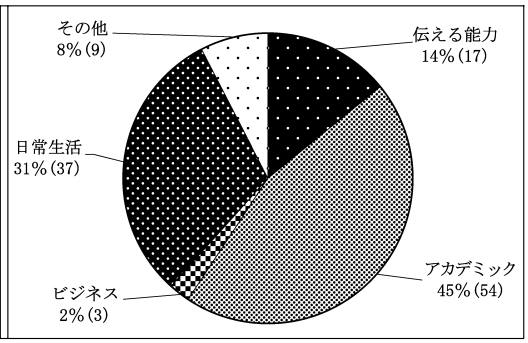

図６．Ｑ１の結果J721-J821の場合（69人）

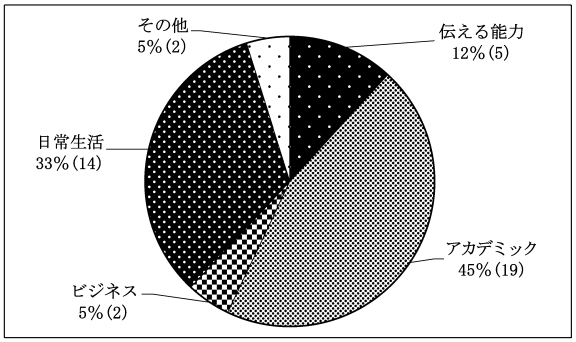

図７．Ｑ１の結果J923の場合（21人）

3.2.2　Ｑ２のレベル別に分類した結果

以下の表２は、レベル別カテゴリーをまとめた結果である[1]。全てのレベルにおいて「語彙・表現」が示す割合がJ521-621は24％で、J721-821は30％、J921は27％と、最も高い結果となった。「語彙・表現」に次いで見られた項目を各レベルごとに見てみると、J521-621の場合は「尊敬語・謙譲語」、J721-821は「文法」、J921は「正確性」であった。

表２．レベル別カテゴリーの結果

上位カテゴリー	下位カテゴリー	J521-621	J721-J821	J921
話す	語彙・表現	24％(31)	30％(33)	27％(8)
	文法	9％(11)	14％(15)	7％(2)
	発音	5％(6)	1％(1)	3％(1)
	尊敬語・謙譲語	11％(14)	9％(10)	3％(1)
	発表	1％(1)	4％(4)	7％(2)
	迅速性	5％(7)	1％(1)	3％(1)
	流暢性	3％(4)	2％(2)	0％(0)
	表現力・伝達能力	6％(8)	10％(11)	10％(3)
	運用能力	4％(5)	4％(4)	0％(0)
	相手の発話に対する反応	2％(3)	1％(1)	3％(1)
	母語の影響	2％(2)	2％(2)	3％(1)
	論理性	0％(0)	3％(3)	7％(2)
	一貫性・結束性	2％(2)	1％(1)	3％(1)
	正確性	5％(6)	5％(5)	13％(4)
	会話練習の不足	3％(4)	1％(1)	0％(0)
	話題	2％(3)	3％(3)	0％(0)
聞く	聞き取れない	3％(4)	5％(5)	3％(1)
	相手の話が理解できない	1％(1)	2％(2)	0％(0)
情意的要因		3％(4)	1％(1)	7％(2)
その他		10％(13)	5％(6)	0％(0)
合計		100％(129)	100％(111)	100％(30)

3．3　身分別に分類した結果

ここでは身分別に分類した結果を示す。身分別の分析は、短期留学生とその他（大学生、大学院生、研究生）の二つのグループに分け、分析を行う。

3．3．1　Q１の身分別に分類した結果

以下の図８と９をみると、短期留学生の場合、日常生活項目が41％を占め、他の項目より日常生活の場面で必要性を感じる人が多い。一方、その他の大学生、大学院生、研究生は日常生活（35％）よりアカデミックな場面（41％）で必要性を感じる人が多いという結果となった。

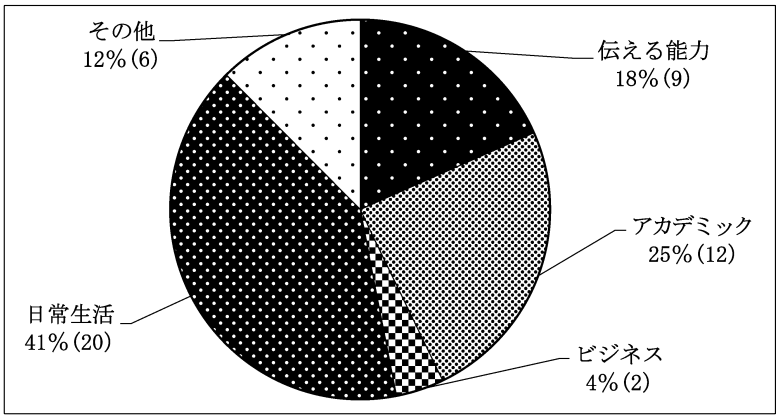

図８．Ｑ１の結果　短期留学生（37人）

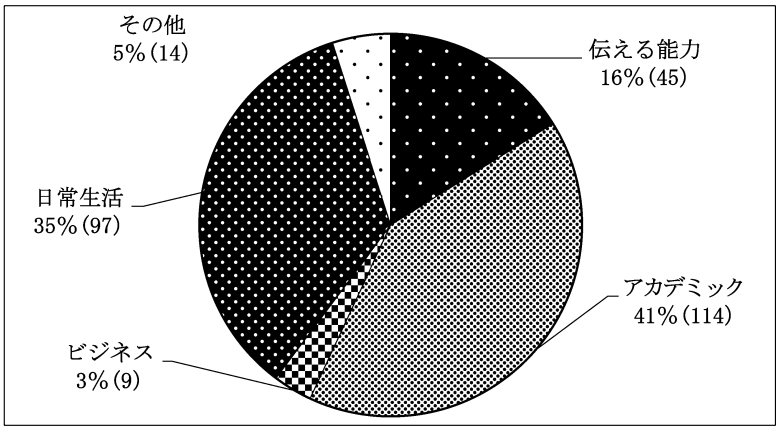

図９．Ｑ１の結果　大学生・大学院生・研究生（172人）

3.3.2　Ｑ２の身分別に分類した結果

表３にＱ２の身分ごとの結果を示す[2]。身分ごとの結果もレベルごとの結果と同様、「語彙・表現」が最も高い割合を占めていた。短期留学生の場合、「正確性」と「尊敬語・謙譲語」の項目が各々12％で、「語彙・表現」に次いで高い割合を占めていたが、その他は「尊敬語・謙譲語」の項目が９％を占め、２番目に高く、残りの項目にそれ程の差は見られなかった。

表３．身分別カテゴリーの結果

上位カテゴリー	下位カテゴリー	短期	その他
話す	語彙・表現	23％(12)	29％(64)
	文法	10％(5)	7％(16)
	発音	2％(1)	3％(6)
	尊敬語・謙譲語	12％(6)	9％(20)
	発表	4％(2)	3％(6)
	迅速性	4％(2)	4％(8)
	流暢性	2％(1)	3％(6)
	表現力・伝達能力	8％(4)	8％(19)
	運用能力	2％(1)	4％(9)
	相手の発話に対する反応	2％(1)	2％(4)
	母語の影響	2％(1)	2％(4)
	論理性	0％(0)	2％(4)
	一貫性・結束性	2％(1)	1％(3)
	正確性	12％(6)	5％(11)
	会話練習の不足	2％(1)	1％(3)
	話題	2％(1)	2％(5)
聞く	聞き取れない	8％(4)	3％(6)
	相手の話が理解できない	0％(0)	1％(3)
情意的要因		2％(1)	4％(8)
その他		4％(2)	8％(18)
合計		100％(52)	100％(224)

４．まとめ

以上、本稿では、2010年度３学期に実施したニーズ調査の中で、「話す」の場合の結果を報告した。

その結果、全体のカテゴリー分析から、学習者は主にアカデミックな場面と日常生活の場面で「話す」必要性を感じ、その際に一番困難であると思う項目に関しては、「語彙・表現」であるという結果となった。

レベル別分析の結果から、レベルが高くなるにつれ日常生活よりアカデミックな場面で「話す」必要性を感じ、どのレベルにおいても「語彙・表現」が困難だと感じていた。また、中級前半では「語彙・表現」の項目の次に「尊敬語・謙譲語」を困難に思っていたが、レベルが高くなるにつれ「尊敬語・謙譲語」が占める割合は低くなり、「表現力・伝達能力」の示す割合が高くなることが分かった。

身分による分析では、短期留学生の場合、アカデミックな場面より日常生活の場面で必要性を感じていたのに対し、その他の大学生・大学院生・研究生のグループは日常生活よりアカデミックな場面で必要性を感じるという結果となった。困難に思う項目に関しては、どの身分によっても「語彙・表現」が占める割合が高く、次いで「尊敬語・謙譲語」の項目が２番目に多い結果となった。短期留学生の場合、「尊敬語・謙譲語」と同じ割合で「正確性」という項目が見られたが、その他のグループは他の項目に関してはそれほど差が見られなかった。

注

１．レベル別の合計は、レベルが記載されておらず、処理できないものがあったため、表１の合計と必ず一致するものではない。

２．身分別の合計に関しても、身分が記載されておらず、処理できないものがったため、表１の合計と必ず一致するものではない。

謝辞

本稿の内容をまとめるに先立って、2011年６月21日に行われた「話す」コースのミーティングにおいて、石田麻実先生、小林真紀子先生、長戸三成子先生、ブッシュネル・ケード先生、堀恵子先生（50音順）より貴重なご意見を頂戴しました。記して感謝申し上げます。

参考文献

関崎博紀（2012）「筑波大学留学センター日本語補講コースにおける学習者のニーズ調査の概要」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』27号：271-276